

東アジアでは常食される主要穀物を「五穀」と呼びます。普通は米、麦、粟、豆、黍、あるいは黍に代わって稗の5種類をさしまた。日本ではコメだけが特別視され、ほかは救荒用雑穀類という低い評価に甘んじることが多いようです。考古学においても雑穀類に対する注目度はイネにくらべて低かったことは否めません。

彦根市南部の平野に位置する稲里遺跡では、弥生時代前期末の土坑内部に層になって堆積していた炭化物から、多量の炭化米とともにアワとキビの種子が出土

しました。西日本においては、弥生時代前期末に灌漑水田の遺構や農具の出土例が増加することから、水田稲作が一般化するのはこの時期からと考えられています。この段階ですでにアワやキビといった雑穀類の栽培が同時におこなわれたことがうかがえます。

雑穀類

竜ヶ崎A遺跡(近江八幡市)では、縄文時代晩期末の土器の底に穀粒状のオコゲが付着しているのが認めら

竜ヶ崎A遺跡のキビ付着土器とキビの電子顕微鏡写真



期末であると認定でき、これによってこれはすべてキビであることがわかりました。この土器は縄文時代晩代測定値もこの土器の時代観と矛盾しないことから、縄文時代晩期末にキビが食用利用されたことが明白になった重要資料です。

滋賀県下では縄文時代晩期にさかのぼる炭化米は知られていませんが、晩期末には北部九州で水田稲作がおこなわれていたことは間違いなく、中・四国から近畿地方でもイネの存在を示唆する断片的な資料が知られています。竜ヶ崎A遺跡の例によって、キビは少なくともイネと同時期に食用

にもたらされたかについては、西日本全体をみわたして検討することが必要です。日常食糧として穀物を確保することが死活問題になる当時の人々の立場にたって考えるなら、雑穀類はコメが不作の場合に利用する

とする考え方はコメの単位によって徴税した近世以降に定着したもので、本来は積極的に評価すべき側面があったと思われま

不作危機分散に欠かせず

れ、電子顕微鏡による観察によってこれはすべてキビであることがわかりました。この土器は縄文時代晩

(財団法人滋賀県文化財保護協会 伊庭功)

(おわり)

次週から新連載「近江時巡り」がスタートします。